

ワシントンは、Brexitによって反露政策を崩壊させられる ことを恐れている

【訳者注】これで、Brexit と EU についての分析的解説は 3 つ目である。これらを併せ読めば、この問題についての真相は、ほぼ完全に理解できるのではないだろうか？

時に、読者の短いコメントが非常に大きな意味をもつことがある。この記事へのあるコメントが、「もしフィンアンが正しければ、(本当に希望がもて、うれしいことだ)」と言い、そこに賛成が殺到した。この「もし正しければ」というのは、フィンアン・カニンガム(ここでよく取り上げる)の判断を疑って言う「もし」では、明らかでない。喜びのあまりに出てくる「もし」である。そしてこれは、アメリカ - NATO を憎む人々のコメントでなく、憎しみそのものを終わらせる可能性を信ずる人々の声である。この人たちと一つになろうではないか。

Finian Cunningham

June 29, 2016, Information Clearing House, RT



(明らかに、米政府宣伝を信ずる人々のデモ)

EU からの離脱を決めたイギリスの驚くべき国民投票は、ハトの檻にネコを放ったように世界を慌てさせたが、一番慌てたのはワシントンで、彼らは、Brexit が彼らの反露政策を台無しにすることを恐れている。

この無言の政策が、戦後の国際秩序の根本であり、これによってワシントンは——この信用できるイギリスの部下の力を借りて——ヨーロッパに対して覇権を及ぼすことができた。この 70 年近く続いたアメリカの大西洋を越えた支配が、崩れようとしている。

先日のイギリスの出来事の直後に、米國務長官ジョン・ケリーが、慌てて、予定になかったブリュッセル訪問を行ったことは、ワシントンが、英選挙民が——43年間この連合のメンバーだった後で——EUを抜け出すという歴史的決定をしたために、恐慌に陥っている確かな証拠である。「ケリーが、英とEUに、離別後の責任を取るように要請」というのが、米放送局ABCが、この外交官の迂回を説明する言い方だった。この報道は、仲間を庇うように、ケリーの気がかりは「地球的市场のため、市民のためだ」と続けて言った。

<http://abcnews.go.com/Politics/wireStory/kerry-visit-brussels-london-talks-uks-eu-exit-40137593>

もっとはっきり言えば、ワシントンの困惑は、特定のものの、つまり自分のためである。特に、EU内部でイギリスの影響力が失われるということは、ロシアを孤立させようとするワシントンの、慎重に考えられた政策に強い影響を与えるだろう。アメリカの、ロシアを孤立させようとする目標は、過去2年間のウクライナ問題より、遙か昔に遡る。実際、反ロシア政策は、第二次大戦の直後にまで遡ることができ、それは英体制と親密に共有され、ウィンストン・チャーチルが1949年に行った、有名な“鉄のカーテン”スピーチによく表現されているように、西側の戦時の同盟国だったソ連に対する、「冷戦」を出発させたものだった。

かつて駐露米大使だったマイケル・マクフォールが、今週末のワシントン・ポストに寄せた意見で、こうした恐怖に十分な表現を与えている。見出しは「Brexitはプーチンの勝ち点である」だった。

https://www.washingtonpost.com/opinions/global-opinions/how-brexit-is-a-win-for-putin/2016/06/25/800e4d3c-3b06-11e6-8f7c-d4c723a2becb_story.html

その論調はほとんど恐慌と言ってよい。マクフォールは、ロシアの、成長しつつある、ユーラシアや中国との政治的・経済的な協力関係に言及している——「ヨーロッパは現在、弱体化しつつあるが、ロシアとその同盟国、またその多面的な諸組織は、強化されつつあり、新メンバーさえ加えつつある。プーチンはもちろん、Brexitの投票を動かしたわけではないが、彼と彼の外交政策の目標は、そこから途轍もなく大きな得をした。」

この、オバマ政府の国家安全アドバイザーでもあった、前アメリカ全権公使は、ワシントンの「最も緊密な同盟国」としてのイギリスが、ヨーロッパの他の国々に対して、アメリカの利益のために働くことができなくなるだろうと嘆いている。

ロシアに関して言えば、これは、EUのモスクワに対する経済制裁と、NATOの軍事力の増強を、深刻に疑問視させることになる。この両側面とも、ワシントンが、制裁の頑強な擁護

者であるイギリスと、NATO の軍国主義によって、リードしてきたものである。今ロンドンが、ブリュッセル（EU 本部）で投票権をもたないとすると、アメリカの対露敵視政策が鈍ってしまう。

イギリスの EU 離脱は、ワシントンを地政学的苦境に陥れる。ニューヨーク・タイムズは見出しでこう言っている——「Brexit によって、ワシントンの大陸への直接の絆は、にわかには擦り切れるか？」

http://www.nytimes.com/2016/06/27/world/europe/john-kerry-brexit-european-union.html?emc=edit_th_20160627&nl=todaysheadlines&nid=65464666&r=0

NY タイムズはこう言っている——「アメリカの高官たちは、イギリスが EU との決別を決意した後、彼らの戦略を考え直すべく奮闘しながら、最も緊急の問題は、彼らが最も信頼でき共感をもつ、代替のパートナーを、ヨーロッパの各政府の中から何とか見つけることだと言っている。」イギリスが、1973 年に、初期の欧州経済共同体（EEC）に初めて参加したとき、彼らはワシントンが指令する政策に従っていた。チャーチルが言った“特別の関係”によって、イギリスは、ワシントンの地政学的利益が、ヨーロッパの各政府に受け入れられるよう取り図ろうとした。特にそれは、ドイツとフランスであり、その理由は、この 2 国が常に、社会主義や、ロシアとの親交関係に傾いていると疑われたからだった。

EU とは、アメリカの CIA によって操作された、政治の計画であって、イギリスがそのために、重要なかじ取り役をしていた、と言うことができる。

<http://www.telegraph.co.uk/business/2016/04/27/the-european-union-always-was-a-cia-project-as-brexiters-discov/>

イギリスは、したがって、生まれてくる EU に、強い NATO 的な見方を与えようとした。アメリカ主導の軍事同盟の非公式的な目標は、戦後 1949 年に NATO が始まって以来、初代事務総長だったイギリスの Lord Ismay（イスマイ男爵）によれば、「アメリカを取り込み、ドイツを抑え、ロシアを締め出す」ことだった。そして、イギリスの EU 内部での存在は——ドイツに次ぐ第 2 の経済大国として——この反ロシア・イデオロギーが、冷戦が終わったとされて 25 年たった後も、常に強い潜在力であり続けるように、働いた。

今日、28 の加盟国をもつ EU ブロックは、米主導の政策、特に反ロシア政策に従うことにおいて、28 か国が加盟する NATO 軍事同盟と、ほとんど区別ができない。モスクワに対する、ヨーロッパによる新たな経済制裁は、EU 諸国に対して、膨大なダメージを与えただけであった。それは自己破壊的であり、馬鹿々々しくも、“ロシアの侵略”という乏しい証拠に基づいたものである。しかしこの政策は、ワシントンとイギリスによる、EU の“NATO

化”のおかげで、広い地域で支配的になっている。

これが、EUブロックからのイギリスの離脱が、ワシントンと、そのロンドンの大西洋政策擁護者にとって、大きな失望となった理由である。英外務長官フィリップ・ハモンドは、この国民投票の結果を最も嘆いた人であり、「クレムリンはこの結果をととても喜ぶだろう」と警告した。 <http://www.rferl.org/content/brexit-russia-eu-britain-influence-sanctions-policy/27819247.html>

国民投票にまでつながった **Brexit** に警告を発したアメリカとは違って、モスクワは、そのような声明を全く出すことなく、それはイギリスの国内政治問題だと言った。ロシア大統領ウラジミール・プーチンは、英米の政治家たちが、**Brexit** に「クレムリンはさぞかし喜んでいるだろう」と邪推のコメントを出したことに對し、これは「低い政治的文化を示すものだ」と一蹴した。 <https://www.rt.com/news/348201-putin-brexit-weak-economies/>

人身攻撃的な反ロシアの言動は、実は、ワシントンとロンドンが、ヨーロッパとロシアの間にくさびを打ち込もうと何十年も工作してきた、悪意ある目的を反映するものである。

<https://youtu.be/0S-7pNfXSfo>

(警告？ アメリカは冷戦時の対ソ連スパイ省を復活せるかも？)

もしヨーロッパとロシアが、政治的・経済的に、相互の安全保障の観点から、接近するような動きを見せるようなことがあれば、覇権的な世界的強国として、ワシントンが失うものは極めて大きいだろう。アメリカと、その大西洋を越えた盟友イギリスは、グローバルな金融資本において固く結び合っているため、彼らは、ヨーロッパとロシアが本来のパートナーとして接近しないように、あらゆる手段を尽くさなければならない。

今イギリスが、米メディアが揶揄して言うように、“リトル・イングランド”に戻りそうな様子なので、ワシントンはその覇権的野心のために、EU内部に新しい代替国家を見つける、将来への動きを見せている。ドイツが、イギリスに代わるものとして、リストのトップにある。フランスは、あまり当てにならないと見られており、ポーランドやバルト諸国は、ワシントンから見れば、あまりに軽量級である。

http://www.nytimes.com/2016/06/26/world/europe/britain-rattles-postwar-order-and-its-place-as-pillar-of-stability.html?emc=edit_ee_20160626&nl=todaysheadlines-europe&nid=65464666

しかし **Brexit** は、ヨーロッパ全土の反 EU 感情を引き起こしてしまった。この反感の一部

は、人々が、ワシントンのヨーロッパへの圧力と考える、寡頭政治、財政的圧迫、それに NATO 軍国主義から来ている。

ワシントンは、イギリスに代わるものを、自動的に、たやすく見つけることはないだろう。いかなるヨーロッパの国家も、イギリスに代わって、最も忠実な、アメリカの利益のために働く熱心な僕になることはできない。

ロシアは **Brexit** という結果に、喜びはしないまでも、安堵する権利はある。しかもロシアだけでなく、ワシントンや NATO の戦争屋の企みから自由な、より大きな平和的国際関係を求める、他の多くの国家や人々にとっても同じである。

イギリスが、ヨーロッパの政治に対する影響力を弱めたことは、ワシントンにも拘束がかかったことを意味する。

どんなことも楽観視することはできない。しかし今後、ヨーロッパが、これまでよりも自由に、ロシアとの正常な、より調和的な関係を結べる可能性が見えてきた。

ドイツは、戦後のロシアとの和解によって、1960 年代、70 年代、80 年代を通じて、一度は限りなく大きな希望の根源だったが、それがいま、元の軌道に戻るができるかもしれない。

ワシントンがパニックを起こすのは、もっともなことである。